

## 昭和時代の蚕品種「太平×長安」の復活と洋装服地への実用化

太平洋戦争のさなかに軍部の喫緊の要請を受け、のちの片倉工業(株)によって育成された蚕品種「太平×長安」。その目的は『高速化する航空機の搭乗員の生命を守るパラシュートの製作に使用する航空生糸用蚕品種』の育成でしたが、戦局の悪化に伴い実戦で使われることはありませんでした。

航空生糸用に育成された「太平×長安」は、「収繭量がすぐれ、当時の対照品種よりも繭糸は長く、繊度は細く、解じょ及び小節点がすぐれており、強力も大きい」ことから、昭和 21 年には高級生糸用品種として国から指定され全国的な主要品種となり、その繭は片倉工業(株)の富岡製糸場や松江製糸場などで繰糸され、輸出生糸のホープとなりました。

その後は、時代の流れとともに新たな品種が求められるようになって、「太平×長安」も昭和 50 年代には実用品種としての役割を終え、その原種は遺伝資源として保存されることとなります。

2011 年、片倉工業(株)で保存されていた「太平×長安」の原種が当研究所に譲渡されたため、「昭和時代の蚕品種の復活と実用化」を目標に品種育成を開始して「純国産シルクを用いた洋装服地の開発」で用いる蚕品種として供し、2016 年と 2018 年には複数のアパレルメーカーが作製した紳士用ジャケットが販売されました。

養蚕学校をルーツに持つ石川県立津幡高校では、創立 100 周年を迎えるにあたり『養蚕復活プロジェクト』を立ち上げ、2019 年からは養蚕授業の復活を目的とした「太平×長安」の飼育が行われ、その繭を使った織物がつくられています。

2023 年には、企業による養蚕支援事業『Reborn the Silk プロジェクト』が立ち上げられ、「太平×長安」を使った商品開発が新たに進められています。

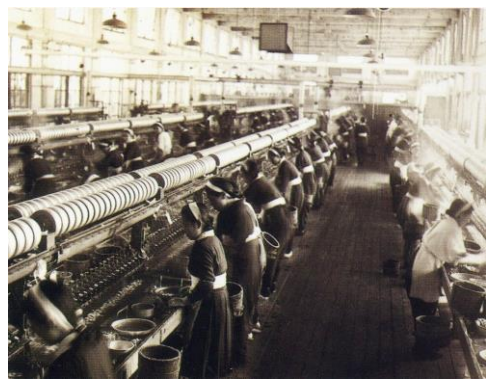
この詳細については、『メンズプレシャス 2016 Summer プレシャス増刊』、『シルクレポート 2019. 10 月号 (No. 63)』と『大日本蚕糸会研究報告』第 66 号(2019)をご覧ください。



富岡製糸場（昭和 15 年頃） 写真提供：片倉工業株式会社



乾繭風景（昭和 15 年頃）



富岡製糸場での繰糸風景（昭和 18 年頃）

写真提供：片倉工業株式会社



「太平×長安」の繭と糸